



宮崎 衣澄 みやざき いずみ

富山高等専門学校
国際ビジネス学科 准教授
研究分野 ロシア美術史

大阪外国語大学地域文化学科ロシア・東欧地域文化専攻卒業
ロシアサンクトペテルブルグ美術アカデミー大学 (I. レービン名称) 留学
大阪大学大学院言語文化研究科博士前期課程修了
大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程修了
富山商船高等専門学校国際流通学科助手
富山高等専門学校国際ビジネス学科 准教授 (現在)

学生との距離が近く 信頼関係が築けています

研究以外の業務で時間をとられて、研究業績は少ないですが、教育面では力をつけてきたと思っています。学生がいろいろと話してくれるので、コミュニケーションがとれ、信頼関係ができていくからではないでしょうか。

なら即応募という感じでした。その時の富山高専の応募条件に「30歳以下」というのがあったのも大きかったと思います。今から思うと、若い先生がほしかったのでしょね。

高専の教員になっていかがですか？

実家の近くに奈良高専があったので、雰囲気はなんとなくわかっているつもりでしたが、入ってみるとやはりいろいろと違っていました。国際流通学科に採用されたのですが、当時は授業以外の実習が多く設けられていました。新人教員は学科の行事や実習内容を知るために、多くの実習に参加していました。授業の準備に不慣れで時間がかかることもあり、時間的にもあまり余裕がなく大変でした。寮の当直や、クラブ顧問の仕事もあり、高専の教員の仕事量と仕事の幅に驚きました。

しかし、新人教員が珍しかったのか、多くの学生が部屋に遊びに来て色々話をしてくれました。富山県に知り合いがいなかったため、学生がいてくれたお蔭で寂しい思いをすることなく、学校になじむことができました。高専の魅力は、学生数が少なく、教員が学生一人一人の個性を把握することができること、そして学生側は教員に対してあまり警戒心や距離感を感じず、本音で向き合ってくれることではないかと思っています。

どのような仕事をしていらっしゃいますか？

今までは、学生主事補や寮務主事補、1年生の副担任などをしました。2015年度は4年生の担任をしています。担任は初めてです。インターンシップの配属先を決めなければならない時期には、毎日学生がたくさんやってきます。本人の希望や家族の意向も聞かなければならないのですが、学生がいろいろと話してくれるので、信頼関係ができたという点では良かったです。寮の日直は採用されるときに聞いていたので、驚きませんでした。勤めているうちに女性教員も宿直に入るようになってしまったことはちょっと想定外でした。今は、子供が小さくて見てくれる人がいないので日直にしてもらっています。

どのような研究をしていますか？

19～20世紀初頭のロシアイコンの研究をしています。イコンとは、正教圏で用いられる聖像画です。日本には19世紀にロシア正教が伝道され、明治期には日本各地に正教の教会堂が建立されました。日本正教会には、当時裕福なロシア人正教徒が寄進した著名なイコン画家によるイコンが数多く現存しており、ソ連期の教会破壊運動を経験したロシアには現存しないものがあります。現在はこのような日本にあるロシアイコンの研究を行っています。

高専の教員になったきっかけは？

博士課程3年の時に高等教育機関での就職を探していました。その時ロシア語の求人をしていたのが富山高専だけだったので、指導教官からの勧めもあり受けました。ロシア語の分野は定員が少ないため、30代は非常勤で仕事をしながら研究業績をためておき、40代になってようやくポジションを得るというケースが多く流れています。大学院を出ていながら、途中であきらめて企業などに就職してしまう人も多いです。そのため、仕事がある



高専に勤めて12年経ちましたが、研究の面では苦勞もあります。研究以外の業務で結構時間をとられるため、大学に勤めた友達と比べると、研究業績は少ないです。独身の頃は、学生が帰ったあとは自分の時間として使えましたが、子供が生まれてからは、子供を迎えに行かなければならないので、なかなか自分の時間は確保できません。海外調査にあまり行けなくなったこともネックです。しかし、与えられた環境の中でできることを探して、あきらめないでやっています。教育面では力をつけることができましたと思っています。高専は大学と違って学生との距離が非常に近いです。大学では大人数での授業ですから、学生が理解できなかったこともなかなか把握できません。高専では、正直に「分からない」といって授業を止めてくれます。また高専では授業外でも、学生がプライベートを含めいろいろな話をしてくれます。それは、信頼関係ができているということなのかなと思います。

どのような日常生活ですか？

子供を出産後、育児休業を1年2ヶ月取りました。当時は教員で育休を1年以上とる人がいなかったようで、少し抵抗を感じましたが、夫が単身赴任していたので、1年2ヶ月を選びました。大学に勤めている友人は3ヶ月ぐらいで復帰したようですが、高専は朝8時半から17時まで授業以外にもいろいろ詰まっている勤務体系ですから、3ヶ月での復帰は難しいと思います。復帰したばかりの頃は、ブランクがあったのでそれを取り戻すのも大変でしたし、子供が急に環境が変わってしまったために保育園に預けるときに毎日泣くので、精神的にも辛かったです。今も別居婚をしているので、平日は夫の助けを求めることができません。

私が住んでいる自治体にはファミリーサポート制度というのがありますが、病気の時に慣れない方に預けられることを子供は嫌がりました。子供も親も安心できる形が一番だと思うので、子供が病気になったときなどは結局奈良に住む実家の母に頼んでいます。

勤務形態としては、復帰した後1年半は「育児短時間労働」制度を利用していました。最初の半年は朝と夕方を1時間ずつ短くして、そのあと1年は朝を1時間短くしていました。時間休で有休を取る方法もありましたが、仕事がしばらく制限されるので、時短で給料が減るという方法をとった方が周囲の人からの理解が得られやすいと思って、そちらを取りました。収入は少なくなりますし、保育園の保育料も、別居とはいえ共働きのため高額になり、今は金銭的余裕がありませんが、一時のことだと思って割り切っています。今の一番の心配は、来年子供が小学校に入るのですが、学童保育の時間が勤務時間と合わなくて、どうしようかと悩んでいます。

高専教員を目指す人へのメッセージ

- 高専の教員は、大学と比較して学生との距離が近く、教育に関してやりがいを感じられると思います。もちろん大変な面もありますが、人と人のつながりという面で教育ができると感じています。現在は高専に慣れたこともあり、働きやすい職場だと感じています。周囲に既に長く勤めておられる女性の先生がいらっしゃるお蔭だと思います。理解のある方がおられることで、全体としていい雰囲気が作られているのかもしれない。文系にとって高専はあまり馴染みがないかもしれませんが、近年は女性教員も増えてきています。是非就職先の一つとして考えてみてください。